

## 教師の専門化意識、地球規模の価値形成について

教職開発コース M1 志津田萌

今回、2回目になります。院生プロジェクトの発表のために再び参加させていただきました。一年間を通し行ってきたセクシュアル・マイノリティの教師の思想と実践に関する研究を発表するということが、テーマに興味を持ち話しかけて下さったり、発表後に質問してくださったりする方が多く、励みになりました。その他、現地の学校への訪問や UNESCO、OECD 見学から、新しい気づきを得ることができました。

### ■ Byleskolan ー教師は「誰」であるのか

自分自身の研究関心が、学校、教師と周囲の関係という点にあるため、校長先生のお話の仕方、そして「教師は聖職者ではなく専門家 (professional) である」「私たちの学校は best school である」というお言葉にカルチャーショックを受けました。お話の内容は日本の教育学でも言われている内容だとは思いますが、それを現職の先生ご自身が言えるという文化に驚きました。professional とは、自分のミッションが何であるかを問い続け、考え方ややり方を変化させていくことである。自分たちは teaching が何であるかをわかっており、綿密な評価と議論を重ねて教育実践をデザインする。disability はその子の問題ではなく teaching の問題であるから、特別支援学級は設けない。これらが一貫した professional としての教師というビジョンとして、校長先生自身の経験から生まれた言葉として語られていました。教育とはなにか、自分はこの子どもに対してどう接するべきかということを中心に、そのためにどのような教育的取り組みが必要であり、他者との協力が必要であるかを考えるというスタイルが確立していました。これはスウェーデンの学校の文化として一般的であるのかはわかりませんが、「自分は専門家だ」と教師が言いづらい雰囲気のある日本にはなかなかないことだと肌で感じる事が出来ました。教員養成や学校内の文化、学校や教師に対する社会的な認知などの複合的な要因から生じているものだと思います。こういう「文化」を作るのは難しいことだと思いますが、日本の教師が多分に文化に縛り付けられているように感じるからこそ、どこから変えることが出来るだろうかと改めて考えるきっかけをいただいた出会いでした。

### ■ UNESCO、OECD ー国際機関、国家、学校・団体の共通価値観は作れるか

これまで国際機関に対する興味が薄く、Education2030 などの存在は知っていたものの、その役割や動向を知ろうとする機会がありませんでした。しかし実際に職員の方のお話を聞くことで、国際機関の動きが日本の政府・行政の動きとも相互に関係を持っていることがわかり、さらにはそれが個々の学校レベルにどのように作用しているのかを知りたいという視野の広がりが得られました。国際機関の役割としては、プログラムや議論の場、調査・研究による情報を提供することで、国や団体、個人間のネットワークを生成していくという

点にあることをお話を聞く中で理解しました。そのネットワークが、各アクターの直面する問題、そして地球規模の問題を解決するに役立つものになるという意味で意義を持つものなのだろうと思います。そして、**SDGs** を定めること、それに基づいて **Education2030** を議論するということは、その多様なアクターが協働して目指すことのできるゴールを定めることであり、それがネットワークの効果をより強めることになると考えられます。そしてそのゴールを示す価値が **sustainability** というキーワードであることもよく理解しました。

実際に日本の中で生活していると、昨年何やら **SDGs** というものがしきりにキャンペーンされていました。そして、私が研究に入っている学校でも **ESD** を実践しているため、教室に **SDGs** のカードが貼られていたりします。そして、ほとんど話題にはならないのですが教育振興基本計画にも「持続可能」という言葉が入れられていたりします。研究の関係で調べる機会があったので私自身はある程度は把握していましたが、国際機関や政府の掲げる「価値」が、聞いたことはあっても慢然と過ごしてはとても見えづらく理解しづらいものなのだということを理解しました。日常を生きる個人が、国際的な動向に注意を払い、社会の持続可能性ということを念頭に置いて行動するという価値観が、教育学でいえば市民性という概念にも関わるのだと思いますが、どのように可能なのかという、個人の意識の規模のようなものに興味を持つきっかけとなりました。たとえば **ESD** を掲げている学校が、管理職に限らずすべての教員が「持続可能性」を念頭において実践を行っているのか。 **ESD**、**SDGs** などの言葉を子どもたちがどれほど理解し意識するようになるものなのか。そして、全ての学校が「持続可能性」をスローガンに **ESD** の実践校になっていくことが最終目標であるのか。つまり、教育に携わる人々が、この「持続可能性」という概念とどのように付き合っているのか、いくべきなのかということ改めて考えたいと思います。また、国際機関で働くということが自分には考えられなかったのですが、**UNESCO** や **OECD** で働く方々と出会いそのお仕事をすることで、初めて身近に感じることができました。

教育について新しい学びを得られたのが大きかったですが、さらに、**Byskolan** や **OECD** で「質問」をすることをとても強調されていたのが印象的でした。“**Question is the best way to learn**”とおっしゃっていましたが、小学校時代からそれが教育の軸として子どもたちに浸透していること、質問することが相手の話への関心度の評価に直接につながるという文化にまでなっていることを実感しました。この在り方に感銘を受けて、自分も今後習慣づけて頑張っていこうということ、また、学校での教育に子どもたちの発言が積極的に認められる環境を作っていきたいということも感じました。

ありがとうございました。